

目次

序	i
第1章 談話と文法	1
1. はじめに	1
2. 主題・解説	7
3. 前提	10
4. 焦点	16
5. 活性・半活性・不活性	21
6. 談話推論	24
補説	27
第2章 照応関係	37
1. はじめに	37
2. 自分	41
3. 「自分」と視点	42
4. 発話主体指向性代名詞	45
5. 心理表現における逆行束縛	47
6. お互い	52
7. 彼自身・彼女自身	56
8. 内部構造とアクセント核	57
9. 自分自身	58
10. c 統御とその射程	61
11. 再帰化辞	67

12. 日英語代名詞の特質差.....	70
13. 参照点モデル.....	76
14. 指示表現の導入.....	83
15. 談話主題とゼロ代名詞.....	86
16. ゼロ代名詞に課される制約.....	90
17. 目的語空所文.....	95
補説.....	96
第3章 省略構文.....	105
1. はじめに.....	105
2. 削除操作.....	108
3. 同一性条件.....	110
4. 名詞句内省略構文.....	114
5. 項と付加詞の非対称性.....	117
6. 「の」.....	119
7. 構造的同一性.....	122
8. 名詞句内省略構文と談話.....	124
9. 日本語の VP 削除.....	125
10. ゼロ代名詞分析.....	128
11. 項削除分析.....	133
12. 間接疑問縮約構文.....	137
13. 島の制約.....	140
14. 分裂文分析.....	144
15. 「のだ」文分析.....	146
16. 間接疑問縮約構文と談話法.....	148
補説.....	152
第4章 後置文.....	159
1. はじめに.....	159
2. 後置要素.....	160

3. 付加文・有標文・修正文	163
4. 談話主題・弱焦点・強焦点	165
5. 後置文とフィラー	170
6. 生成文法における分析	175
7. 再び, 談話主題・弱焦点・強焦点	180
8. 談話における情報連鎖	184
補説	186
第5章 かき混ぜ操作	193
1. はじめに	193
2. 句構造的解決	195
3. 移動	196
4. 着地点を巡って	199
5. 意味的に空な移動	202
6. 移動の駆動力	204
7. 素性分析	208
8. 談話主題	211
9. かき混ぜ句の談話機能	215
10. 文法性判断再考	221
11. 束縛変項	227
12. 談話の地平へ	233
補説	236
第6章 分裂文	247
1. はじめに	247
2. ハ分裂文とガ分裂文	248
3. 分裂文と疑似分裂文	250
4. 基底生成分析	254
5. 移動分析	255
6. 焦点構造	261

7. ガ分裂文の統語派生	266
8. 引き継ぎと受け渡し	268
9. 談話主題の所有権	270
10. 後項焦点・前項焦点・全体焦点	271
補説	276
第7章 主題標識残留構文	285
1. はじめに	285
2. コラボレーション発話行為文	287
3. 断定	289
4. 命令文の問題	292
5. 主題標識残留構文と左周縁部	293
6. 疑似対照主題	298
補説	299
索引	303

第1章

談話と文法

1. はじめに

生成文法理論に基づく言語研究は、基本的に、独立して存在する1つの文 (sentence) を分析対象とする。2つ以上の文を対象とすることもあるが、あくまでも基本は1文であり、1文の統語構造と意味構造を明らかにしようとする。そして、文法 (文を作り出す能力) の中核は統語派生であり、この派生の出力が、音声に関する調音—知覚システムと、意味に関する概念—意図システムに対する指令として働くと考えられている。従って、統語派生に談話情報が入り込むことは通常ない。つまり、生成文法の理論的枠組みでは、談話は最初から除外されていたと言ってよい。この方法論は、人間の言語能力を明らかにしようとする生成文法の企て (generative enterprise) にとっては、必然的な選択であったと言えよう。

1980年代以降の統率・束縛 (GB) 理論においても、生成文法が1つの文を分析対象とし続けてきた理由の1つに、語彙 (特に述語) の持つ特性が重視されるようになったということがある。この特性を基に、項構造や X-bar 理論などが整備されてきたのである。項構造とは、例えば「送る」の有する意味役割を、[動作主, 対象, 着点] のように記載したものを指す。また、N/V/A/P といった語彙範疇のみならず、T(ense) や v といった機能範疇は、全て [_{XP} 指定部 [_X X 補部]] という形に集約できるとする X-bar 理論により、範疇間の共通性も捉えられるようになった。

述語は、通常、1つの文 (節) につき1つしかない。従って、述語の持つ特性を重視して言語の構造を探究するということは、探究の対象が自動的に

第 2 章

照応関係

1. はじめに

本章で照応関係の表題の下に扱うのは、①それ自身が指示性を有する「山田太郎」などの固有名詞や、指示性を持ち得る「机」「信念」などの指示表現 (referring expression; E-expression), ②先行詞が存在して初めて指示対象が特定できる「彼」「彼女」「pro (ゼロ代名詞)」などの代名詞類, そして、③照応形 (anaphor) である。照応形には、「自分自身」「彼自身」などの再帰形 (reflexive) と、相互照応形 (reciprocal anaphor) の「お互い」がある。照応関係とは、(1a-d) のように、ある名詞句が別の名詞句と同一指示 (coreference) の関係にあるか、それとも別指示 (disjoint reference) の関係にあるかを示すものである。

- (1) a. 山田太郎_i は彼_i の家柄を誇りにしていた。
- b. 山田太郎_i は彼_j を少し敬遠していた。
- c. 山田太郎_i は自分自身_i を自慢し過ぎる。
- d. [山田と田中]_i はお互い_i をライバルだと思っている。

「i」の指標 (index) を持つ名詞句同士は同一指示解釈であることを示し、「i」と「j」の指標を持つ名詞句同士は別指示解釈であることを示す。

なお、「指示」とは指し示すことで、次の3区分がある。

- ①現場指示：発話現場にあるものを指し示す。
- ②文脈指示：言語文脈中にある先行詞を示す。

第3章

省略構文

1. はじめに

言語には、意味解釈のために必要な言語形式が表面上は欠けている、様々な省略構文がある。例えば(1)のようなものである。「e」は、そこに何らかの省略があることを示す(「e」は空範疇(empty category)の略)。

- (1) a. パフォーマンスに対する HIRO の情熱は、Max の e より遥かに熱い。
- b. 輝彦が平塚に自分の工房を建てたので、敏郎は鎌倉に e 建てた。
- c. 彩香が連休の間にどこかへ旅行に行ったそうだが、どこへ e かは、僕は知らない。

(1a) は、「Max の情熱」という大きな名詞句の中にある名詞句「情熱」が削除されているもので、「名詞句内省略(NP-ellipsis)構文」と呼ばれる。(1b) は、「自分の工房」という項名詞句がそのまま削除されているもので、「項省略(Argument Ellipsis)構文」と称される(「項」とは、述語の必須要素となるものを言う)。そして(1c) は、「どこへ彩香が旅行に行ったか」という間接疑問文から「彩香が旅行に行った」の部分を削除し、Wh 疑問詞の「どこ(へ)」と疑問を表す「か」を残留させたもので、「間接疑問縮約(Sluicing)構文」と呼ばれる。いずれも、文の前半部分に、省略箇所に対応する何らかの先行詞が存在するものである。省略箇所と先行詞がかなりの程度において同一でなければならないことは、直観的にも納得できると思われるが、省略構文における「同一性」は相当に大きな問題を提示するので、本章でも後に詳しく論じることしよう。

第4章

後置文

1. はじめに

日本語は SOV の語順をとる言語であり、述語（及び、それに付加される助動詞や終助詞などの総体）が文末に置かれるのが無標の状態であるが、「ついに買ったぞ、家を」のように述語の後に要素が来る場合がある。このような文を「後置文 (postposing construction)」とすることにしよう（生成文法では右方転移文 (right dislocation) と呼ばれることが多い）。なお、詳しくは後に見るが、いわゆる後置要素には、元位置から文字通り後置されるものと、文末に基底生成されるもの（後置するのではなく、最初から文末に置くもの）の2種類があるので、「後置要素」と一括するのは事実上反するが、便宜上、後置要素と称しておく。

後置要素は所定の位置に戻すことが出来るのが普通で、例えば (1a) であれば「今朝、博人が来たんだよ」のようになるが、(1f) のように、所定の位置となるべきところに項（「山田」）が生じているために戻せない場合もある。

- (1) a. 今朝、来たんだよ、博人が。（主語）
- b. おたくの子が先に殴ったんだぞ、うちの息子を。（目的語）
- c. 本当に成功したんです、この方法で。（付加詞）
- d. 入っていったんです、不審な男が、あのビルに。（複数要素の後置）
- e. 突然、大男が現れたんです、2メートルくらい。（名詞修飾語）
- f. 山田は馬鹿だよ、あいつは本当に。（元に戻せない後置要素）

第5章

かき混ぜ操作

1. はじめに

日本語は、西欧系言語に比して、自由語順 (free word order) 的特質を持つ言語だと言われている。(1a) の基本語順を取る文から、(1b-c) のように語順を変えた文が可能であり、前置されている要素が受ける強調的意味合いの差はあるが、(1a-c) のいずれも基本的意味は異ならない。また、(1d) のように、複数の要素を節頭に前置することも可能である。生成文法では、(1b-d) のような移動操作を「かき混ぜ操作 (scrambling)」と呼び、移動した要素を「かき混ぜ句」と称する (以下、他文献から引用する文例を含め、かき混ぜ句の後に「,」を入れて示す)。

- (1) a. 喫茶店の主人が元町商店街で犯人らしき男を見たそうだ。
- b. 元町商店街で、喫茶店の主人が犯人らしき男を見たそうだ。
- c. 犯人らしき男を、喫茶店の主人が元町商店街で見たそうだ。
- d. 元町商店街で、犯人らしき男を、喫茶店の主人が見たそうだ。

かき混ぜ操作には (2a-c) の3つのタイプがある (「t」はかき混ぜ句の痕跡 (trace) を示す)。なお、(2a, b) でのかき混ぜ句の着地点については諸説あるのだが、本章では、Saito (1985) 以来最も標準的に援用されてきた S 付加位置で示すことにする。付加 (adjunction) とは、元の範疇 ((2a) では2番目の S) の上にそれと同じ範疇を作り、移動の適用を受けた α ((2a) では「手紙を」) をそれに支配させる操作である。一般化して示せば $[_{XP} \alpha [_{XP} \dots t \dots]]$ のようになる。

第6章

分裂文

1. はじめに

(1) は、「山田さんがXを買った」ことを前提とし、Xを焦点句として、文末の「だ/です」の前に置く構文である。「山田さんがXを買った」を、「山田さんが買った(のは)」と「X(だ/です)」という2つの部分に分裂させているので、「分裂文(cleft sentence)」と呼ばれる。

(1) 山田さんが買ったのはタワマン {だ/です}。

一方、「焦点(focus)」は、話し手が聞き手に最も伝達したい情報である。例えばWh疑問文では、焦点はWh句の答として示される。(1)は、この文の前に、「山田さんは何を買ったんですか?」という問いの文を置くと自然な流れとなるが、この問いに対する答え「タワマン」が焦点となる。焦点とは、「影」として想定される対照集合{タワマン、戸建て、アパート…}の中から「タワマン(X)」のみを選択するものなのである。

(1)は、前提を構成する部分「山田さんが(Xを)買った」(以下、「前提節」と呼ぶ)が「は」で標示されているので、「ハ分裂文」と呼ばれる。これに対して、「山田さんが買ったのがタワマンです」のように、「は」ではなく「が」で標示するタイプがあり、このタイプは「ガ分裂文」と称される。ハ分裂文とガ分裂文は、焦点要素としてどのような範疇を許容するかが異なっており、また、双方の焦点構造も異なる。これらのことについては第2節と第6節で論じる。

一方、英語には、(2a, b)の2タイプの分裂文がある。学校文法では強調

第7章

主題標識残留構文

1. はじめに

「主題標識残留 (Topic Particle Stranding) 構文 ; 以下, TPS と略記」(Nasu 2012) とは, 話者 A が話題 X (以下, 下記の (1A) のように二重線で示す) を, 典型的には疑問文の形で導入し, それを受けた話者 B が, X を音声化せずに (以下, ϕ で表示), 主題標識「は」のみを残留させる (1) のような構文である。なお, アルファベット大文字表記 (A・B) については, 「話者」と, その話者による「発話」の双方の意味で用いる。(TPS に関する最初の指摘は服部 1949 のようである。ただし, 服部は「ごく稀な」現象であると述べている。)

(1) A : 広田はどうした?

B : ϕ は …, もう帰りました。

当該「構文」は, 1 人の話者の発話だけでは完結せず, 2 人の話者による発話の総体で成立するという特性を有する。では, 構文ではなく談話ではないかと思われるかもしれないが, 後に述べる理由で, 2 人の話者が共同して作り上げる「構文」であると考えている。

(1A) の発話に後続する B の発話としては, (2a) のように話題を繰り返して「広田は」とするか, あるいは, (2b) のように「広田は」を全て省略する方が通常であるが, 敢えて「は」のみを残す点にこの構文の特徴がある。「 ϕ は」自体については, 有田 (2009, 2015) に倣い「裸のハ」と呼ぶことにしたい。